

複言語話者の現実

-日本におけるスロベニア人の語りから考察-

Grudnik Miha

0. 研究要旨

Zarate, Lévy & Kramersch (2011) によれば 1990 年代以降、ヨーロッパ圏内における外国語学習の重要性が高まった。それをきっかけに複言語主義という概念が提唱され始めた。それは、Common European Framework of Reference for Languages (CEFR) などが提唱しているように、「1. 能力としての複言語主義」「2. 価値としての複言語主義」の 2 つの要素から成り立つと言われている。しかし、上記の CEFR など中心に「1. 能力としての複言語主義」を中心に定義されていることから、本研究ではこの複言語主義の定義ののっとり、複言語話者を「複数の言語を操る能力のある者」と定義し、彼らを取り巻く環境について考察していく。

日本の総人口の 2,1% を占める在留外国人は、日本において言語的あるいは文化的に少数派（マイノリティー）である。しかしその少数派の中においても、国民や母語話者数に偏りのある国や言語がある。本研究では、そのような日本在留外国人コミュニティにおける言語的マイノリティーとマジョリティーに属する留学生に着目する。

イギリス人学生を比較対象にしながら、在留スロベニア人複言語話者の言語学習の経緯を辿る。彼女たちが、言語的マイノリティに置かれた際に生じる言語使用の変化の考察を、研究課題として設定している。研究対象者としては、3 名の在留外国人の複言語話者（スロベニア人 2 名、イギリス人 1 名）を選定した。研究方法として、35–50 分のインタビューを行ない、得られた語りを文字起こし、詳細な分析を行なった。

以上の 3 名の語りから得られた結果を分析し、環境が言語学習者に大きな影響を与えるとともに、環境に同じ母語話者が少ないほど、母語・言語の使用状況の変化が大きいことがわかる。

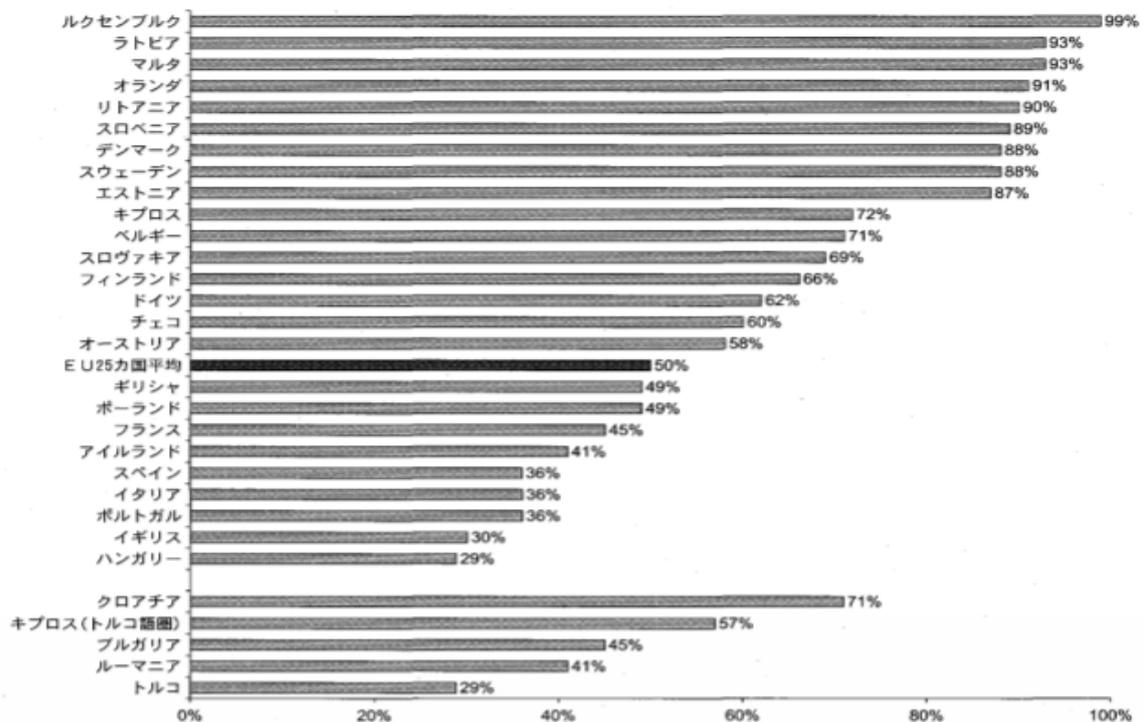
目次

1. はじめに.....	3
2. 先行研究.....	6
3. 研究課題.....	7
4. 研究方法.....	8
4-1. 研究対象.....	8
4-2. データ収集と分析.....	10
5. インタビュー結果.....	13
5-1. 研究対象者の言語学習及び習得のライフストーリー.....	13
5-1-1. ネヤさん.....	13
5-1-2. レナータさん.....	14
5-1-3. サラさん.....	16
6. 考察.....	19
6-1. 環境による外国語学習の差異について.....	19
6-2. 母語の使用度について.....	21
7. 結論.....	28
引用文献.....	30

1. はじめに

Zarate, Lévy & Kramersch (2011) によれば、1989年に起こったベルリンの壁崩壊をきっかけに、ヨーロッパ諸国の地政学的関係が変化し、新たな国際的経済秩序が構造され、諸国民・諸言語の関係性の変容も同時にもたされた (p.6)。Zarate らはこの一連の出来事から、言語・文化における顕著なグローバル化の動きが導かれたと論じる (2011: 4)。これにより、ヨーロッパ圏内における外国語学習の重要性が高まった (Zarate, Lévy & Kramersch, 2011: 4)。木戸 (2006) の研究によれば、ヨーロッパ圏内において母語以外の言語で会話に参加できる者の割合は、EU25 各国平均で 50%、つまり 2 人に 1 人母語以外の言語を操っているという結果が出ている (図 1)。

図 1 母語以外の言語で会話に参加できる者 (%)



[出所] European Commission, *EUROPEANS AND LANGUAGES*, September 2005, p.3.

図 1 を見ると、スロベニアは人口の 89%が母語以外の言語で会話に参加できる、つまり複数の言語を話すことができると回答していることがわかる。ここでスロベニアという国について説明したい。

スロベニアは中央ヨーロッパに位置する国で、アルプス山脈、カルパチア盆地、ディナル・アルプス山脈、地中海というヨーロッパの 4 つの地理的な部分や主要な文化が交差するところに位置している (Perko, 2008)。国土面積は 20,271km² であり、日本の四国とほぼ同じ面積である¹。Republic of Slovenia Statistical Office (スロベニア共和国統計局) (2018) のホームページによれば、スロベニアの人口は 206 万 6,880 人 (内、外国籍 121,875 人[5.9%]) であった。これはヨーロッパの 2015 年時点での総人口の 7 億 4081 万 4000 人 (United Nations, 2017) の 0.3%弱である。このことから、スロベニア人という国民、つまりはスロベニア語の母語話者はヨーロッパ、また世界においても少数の存在であると言える。

法務省 (2018a) によれば、日本に在住しているスロベニア人も極めて少なく、95 人である。日本在住のスロベニア語母語話者は 95 人程度である。また法務省 (2018b) は、2018 年 3 月時点での日本における在留外国人を、256 万 1,848 人であると公表しており、前年と比較すると 17 万 9,026 人 (7.5%) 増加しているとも発表している。在留外国人の数が増加している背景も加味すると、スロベニア人は日本においても、また在留外国人の中においても、少数派に位置づけられていると言えよう。

本研究では、現在日本に在留しているスロベニア人留学生に焦点を当て、複数言語を扱う留学生がこれまで送ってきた言語生活に注目したい。また、研究対象者とのインタビューを通して得られた語りから、対象者が自分自身の言語的アイデンティティをどのように捉えているかについての考察を行うことを目的としている。

日本においてもこのような現象が見られる。日本法務省の統計データによると、2018 年 6 月に日本における総在留外国人の数は 263 万人にまで上っており、2014 年 6 月の 205 万人弱より 28.3%も増加している。日本への流動性が高まっていると言えよう。

本稿では現在日本に在留しているスロベニアの複数言語話者留学生に焦点を当て、日

¹ スロベニア共和国政府ホームページ (https://www.vlada.si/en/about_slovenia/ [Date of Access: 24 Jan 2018].) を参考にした。

本在住の複数言語話者留学生が送ってきた言語生活について述べる。また、インタビューを通しての対象者の語りをもとに、対象者が自分自身の言語的アイデンティティをどのように捉えているかについての考察を行う。

2. 先行研究

「複数言語主義」について

複言語主義 (plurilingualism)²は、欧州評議会 (言語政策部門) によって生み出された新しい用語である (柳瀬, 2007)。この複言語主義には2つの側面がある。それは「1. 能力としての複言語主義 (plurilingualism as a competence)」と「2. 価値としての複言語主義 (plurilingualism as a value)」である (柳瀬, 2007; Council of Europe, 2007: 17-18)。しかし、Common European Framework of Reference for Languages (CEFR) (2001)などでは「2. 価値としての複言語主義」の側面よりも「1. 能力としての複言語主義」が強調されており、複言語主義は狭義の意味では「1. 能力としての複言語主義」を指し、広義の意味では「1. 能力としての複言語主義」、「2. 価値としての複言語主義」の両方を包摂すると理解することができる (柳瀬, 2007)。

ここで「1. 能力としての複言語主義」の定義について確認したい。CEFR (2001)によれば、「コミュニケーションのために一つ以上の言語を使い、間文化的やりとりに参加する力であり、そこでは人間が、いくつもの言語においてそれぞれ様々な程度の言語能力を有し、またいくつかの文化での経験をも有する社会的主体としてみなされている。この力は、別個の諸能力を立てに並べたり、横に並べたりしたものとはみなされず、むしろ使用者が[その都度]引き出すことができる、複雑で、複合したとさえもいえる存在としてみなされている。」 (Council of Europe, 2001: 168; Council of Europe, 2007: 17; 柳瀬, 2007: 62) だと定義されている。

これと似た概念で「多言語主義 (multilingualism)」というものが存在するが、欧州評議会 (言語政策部門) は、既述の複言語主義が個々人の能力について言及しているものであるのに対し、多言語主義 (multilingualism) は社会の状況を表す用語であると区別している (Council of Europe, 2007: 10; 柳瀬, 2007)。本研究では母語以外の言語を話す人々を複言語話者と呼び、その定義を複言語主義の定義にのっとり論じていく。

² plurilingualism には様々な訳語が与えられているが、吉島・大橋、他 (2004) に従い本研究では複言語主義と呼ぶ。

3. 研究課題

在留スロベニア人学生の複数言語話者の言語習得の経緯を記述する。さらに、対象者の使用言語の状況を、インタビューを通して得られた語りから分析し、考察する。それにあたり、以下の研究課題を設定する。

- a. スロベニア人の言語学習者を取り巻く環境を明らかにした上で、その環境が彼らの言語学習にどのような影響を与えているを分析する。
- b. 日本において母語が少数派言語に位置付けられるなかで、彼らの母語アイデンティティ及び使用状況をどのように語っているのか。

なお、比較対象として、在留イギリス人学生の複数言語話者も研究対象者とする。

4. 研究方法

4-1. 研究対象

日本文部科学省が長年にわたり行っている国費留学生制度を利用し、現在日本の国立大学に正規大学生および大学院生として留学している複数言語話者 2 名とイギリス有名大学の（スロベニア人 2 人、イギリス人 1 人）を本研究の対象と設定した。この留学制度は、世界中から日本に関心のある外国人を試験やインタビューによって厳正に選考した後、日本の国立大学に正規入学させるという制度である。留学の期間は大学部生の場合は 5 年間（日本語教育センターで 1 年、大学で 4 年）、大学院生の場合には 2 年半から 4 年間（研究生として半年から 2 年、大学院で 2 年）となっている。

研究対象者は 3 人とも子どもの頃から母語以外に様々な外国語を身に付け、現在では複数の言語を操れる、いわゆる複数言語話者である。インタビューをするにあたって話者数が極端に少ないスロベニア語ではなく、日本語を使用することにした。なお、対象者 3 人の日本語学習歴は 10 年ほどであり、日本語能力試験 1 級に相当する。アクセントには多少訛りと文法的なマイナーなミスを除き、話すことへの不自由は極めて少ないと考えられる。

対象者 3 人とも現在母国を離れ、日本人が人口のほとんどを占める日本で、外国人というマイノリティーとして日本に在留している。

日本に在住しているスロベニア人は極めて少なく、95 人である（法務省, 2018a）。言い換えれば、スロベニア語を母語とする者は 95 人程度である。従って、外国人という日本におけるマイノリティー内でのマイノリティーであり、且つ言語的な面でも極めてマイノリティーである。それゆえ、日本に在住しているスロベニア人は、日常生活において自分自身の母語を使うことは稀有である。

その一方で日本におけるイギリス国籍所持者は2018年6月時点で17,041人と在留スロベニア人の約180倍と多い。さらに本研究のイギリス人対象者の母語である英語話者数はさらに多いと考えられる。

しかし、実際には日本在留外国人の使用言語ごとの話者数に関するデータは乏しく、正確な英語話者数は不明であり、その推定も困難である。そこで、簡単のために日本在住の英語話者として、英語を公用語とする国々出身の日本在留外国人の英語話者、英語を公用語としない国の国籍を有する在留外国人の英語話者、日本国籍を持つ英語話者を想定する。まず英語を公用語とする国々出身の日本在留外国人人口の英語話者数は日本法務省の公開する在留外国人の国別人口を合算すると、11万人以上（在留外国人の総人口の約4.3%）と推定される。彼らのうちの全員が英語を使用できると仮定すれば、最低でも在留外国人の総人口の約4.3%が英語を使用できると見積もることができる。次に、英語を公用語としない国の国籍を有する在留外国人の英語話者数についてであるが、これについては推定に困難を極める。最後に、日本での中学教育課程に英語が含まれていることを考慮すれば、日本国籍を持つ英語話者は、少なからず存在すると考えられる。上記を考慮すれば、日本在留外国人の使用言語において、英語はスロベニア語と比較すると、格段に優占的な言語であると言える。

対象者概要

対象者 ³ （性別、年齢）	出身国	在留年数	特記事項
ネヤ（女、26歳）	スロベニア	1.5年（2017年4月～） 現在 修士課程1年生	2010年に外務省のプログラムを利用し6か月間日本の高校での交換留学 文部科学所の留学

³ 本研究では、人名、地名等の個人情報を含む固有名詞に関しては、すべて仮名を用いた。

			制度を利用し1年の大学交換留学経験有り
レナータ（女、23歳）	スロベニア	3.5年（2015年4月～） 現在 学部3年生	旅行で2回ほど来日されている（合計3か月間程度）
サラ（女、25歳）	イギリス	10か月（2018年4月～） 現在 修士課程1年生	大学の留学制度を利用し2014年に1年の交換留学経験あり

4-2. データ収集と分析

本研究では、3名の留学生ネヤさん、レナータさん、サラさんの語学学習の経験を語ってもらうため、3名に対し、半構造化インタビュー（e.g., フリック, 2002/2004）を行った。

インタビューをするにあたり、4つの中心となる質問（脚注参照⁴）をあらかじめ設定した。加えて、必要に応じた補足的な質問を追加しつつ、インタビューを進行した。インタビューは後述するように、1名につき35分から50分、3名で計2時間弱行った。また、留意が必要なインタビュー前後の会話や出来事などに関してはフィールドノートに記録した。

⁴インタビュー質問

1. どのような言語生活を送ってきたのか。（それぞれの言語をいつ、またどのくらいの期間学習したか。）
2. どのように言語を身につけたのか。
3. どの言語で自分自身を最も表現できるのか。（様々な状況別で考える 例：学校、職場、日常会話）
4. 母語をどのくらいの頻度でしようしているのか。

インタビュー中の使用言語は日本語を選択した。なお、必要に応じて英語やスロベニア語を使う場面もあった。また、インタビューを行う場所には、研究対象者が頻繁に利用する馴染みのある場所（カフェ、対象者の自宅）など、研究対象者ができるだけリラックスして話ができる場所を選択した。

インタビュー分析（以下、研究対象者の言語学習及び習得のライフストーリー）の形式は *Plurilingual and pluricultural competence* (Coste, D., Moore, D., & Zarate, G., 2009) の appendix を使用した。

さらに、インタビュー中は、筆者と研究対象者の人間関係とラポールに留意した（e.g., 桜井, 2002; 桜井 & 小林, 2005）。まず、インタビュー前には本研究参加への同意書にあらかじめ目を通してもらい、本研究の内容、データの保管等についての情報を共有し、承諾を得た。

尚、収集したインタビューデータについては、厳重に保管した。さらに、インタビュー中は個人的な話を唐突に尋ねることは避け、会話のなかで相手を不快にさせないよう配慮した。

以下に各インタビュー時の詳細を記述する。

ネヤさんとのインタビュー：

ネヤさんとのインタビューは約 35 分のをネヤさんの家で行った。ネヤさんに会うことは本インタビューで 2 回目だったが、インタビュー協力をお願いをしたところ、とても肯定的な反応をいただき、家に誘ってくださった。炬燵に入り、紅茶を飲み、クッキーを食べながらリラックスした状態でネヤさんの本音を行うことができた。

レナータさんとのインタビュー：

レナータさんとは2008年にリュブリャナ⁵にあった日本のロックイベントに出会い、現在まで友情関係を保っている。インタビューは50分ほどのものを、レナータさんが暮らしている大学生寮の部屋で行った。インタビュー後も言語的アイデンティティの会話が弾み、会話中に得た情報をフィールドノートに記録した。

サラさんとのインタビュー：

サラさんとは2014年、サラさんが初来日のときに筆者（=Grudnik）と同大学で留学していた。インタビューはサラさんの行き付けのカフェで行った。畳の座席に腰をかけ、お茶を飲みながら、サラさんの言語的アイデンティティ等について伺うことができた。カフェには私たち以外に客がいなかったため、カフェで流れていた音楽以外に騒音はなく、サラさんの注意を引くようなものはなかった。インタビューではサラさんが普段使っている関西弁で話してもらった。

⁵ スロベニア共和国の首都

5. インタビュー結果

5-1. 研究対象者の言語学習及び習得のライフストーリー

5-1-1. ネヤさん

ネヤさんは現在東京にある大学院に正規留学生として在籍している。母語のスロベニア語に加えて、英語、ドイツ語、日本語を流暢に話することができるという。英語とドイツ語は学校で習い、また日本語はしばらく通っていた大学の講座を除き、ほぼ独学で習得したと語る。そのほか、スペイン語がある程度理解でき、現在大学ではチェコ語の授業を受講している。以下では彼女が上記の言語を習得した過程について、概説する。

出身はスロベニアで、スロベニア人夫婦のもとで生まれ、母語はスロベニア語である。小中学校に在籍時、8歳から英語を、翌年からドイツ語を習い始めた。文法の勉強は嫌いだったと言うが、外国語の才能があったとしばしば先生に褒められていた。本人曰く、小中学校の卒業時点では英語とドイツ語を「普通に話せた」、「とても上手だった」という。普段からとても謙虚であるネヤさんのこの発言から、ネヤさんが高校に入学時にドイツ語と英語を非常に高いレベルで使いこなせたと認識していることがわかる。これらの言語の勉強には高校に入ってからでも励んでいたようだ。

また、ネヤさんが小学生だった頃、スロベニアでメキシコのテレビドラマが流行っており、テレビで毎日放送されていた。彼女はそれを見てスペイン語もある程度理解できるようになったという。現在はアルゼンチン人の男性と交際しており、本格的にスペイン語の勉強をしている。彼女は「アルゼンチンに行ったら普通にスペイン語が耳に入ってきて、70%程度わかると思う」と語っている。

日本語に関しては、15歳のときにドイツ語の雑誌で偶然日本のロックバンドの記事をきっかけに興味を持つようになった。日本のロックミュージックに関心を持ち、インターネット上でその楽曲を視聴し、日本語の音韻に魅了されたという。大学入学以前から1年間スロベニアの大学で日本語の公開講座に参加していた。その後、教科書を手に入

れ、独学で日本語の勉強を続けていたという。そして17歳時（2009年）に日本外務省が主催していた交換プログラムを利用し、岐阜県の高校で1か月の短期留学を経験した。当時出会った友人や、帰国後にインターネット上のチャットルームで作った日本人の友達とうまく会話ができるよう、日本語の勉強をその後も続けた。高校卒業後は、かつて公開講座を受講していたスロベニアの同大学の文学部にて日本語学と比較文学を専攻し、在学中には東京都内の大学での留学を経て卒業した。

現在、大学院でも文学を専門にしており、安部公房とフランツ・カフカの作品を研究題材としている。カフカのチェコ語の著作を読みたいなど、将来チェコで暮らすことを夢見て昨年から大学でチェコ語の授業を受講している。

尚、ネヤさんの両親もスロベニア語以外に様々な言語に堪能である。母は英語、ドイツ語、セルボ・クロアチア⁶語が流暢であり、イタリア語は会話レベルで使用できる。また父は、セルボ・クロアチア語がネイティブレベル、ロシア語と英語は昔勉強したことがあるが、現在は話せないと語っている。両親から「外国語を勉強しなさい」のような言葉は一切言われていないという。

5-1-2. レナータさん

レナータさんは幼少期に母語のスロベニア語以外に、ノルウェー語を自然習得し、幼稚園では英語を習っていた。10歳頃、メキシコやスペインのテレビドラマからスペイン語を覚え始め、より本格的に学習したいという思いから、語学学校に通いだした。スペイン語の次には13歳時に日本語に興味を湧き、勉強し始め、さらに15歳時にはロシア語も勉強し始めた。これらは現在まで勉強を続けてきたという。レナータさんは言語に常に興味を持っていたといい、上記で述べた言語以外にも、フランス語、中国語、韓国語の学習経験があると語っている。

⁶旧ユーゴスラビアの公用語であった言語 現在ではセルビア、モンテネグロ、ボスニア・ヘルツェゴビナ、クロアチアでそれぞれの国のバリエーションである（若干の差異しかないけれど）。スロベニア人は個人により、現在話しているバリエーションが異なるため、本稿では昔のままのセルボ・クロアチ語と呼称する。

レナータさんの出身国はスロベニアであり、スロベニア人のシングルマザーのもとで育てられた。母は母語スロベニア語以外に英語やフランス語、ノルウェー語、セルボ・クロアチア語など、複数の言語を使用できるが、それらの言語のもとでレナータさんを育てようという考えはなかったといい、それ故、レナータさんは第一言語としてスロベニア語を習得した。4歳のときに母とノルウェーへ引っ越し、ノルウェー語を自然習得していた。本人はそのときのことは特に記憶に残っていないが、母や祖母によれば「その時は母語並みに喋れたらしい」という。しかし1年後に帰国し、ノルウェー語を忘れてしまったと語る。ノルウェーにいた頃はスロベニア語を使うことを恥ずかしく感じ、また一方で、スロベニアに帰国後はノルウェー語を話すことが恥ずかしかったそうで、とても頑固な子だったと述懐する。

帰国後は、教育方針が先駆的な教育手法をとる幼稚園に入学し、ゲームなどを通して英語を習い始めた。それ以降、小中学校1年生から高校卒業まで英語学習を継続した。

「ずっとちっちゃい頃からやっぱり英語は、結構私がクラス1位というのがずっとあって…」と周りの学生よりも英語能力が高度なレベルにあったと自己評価している。幼い頃からテレビで見ていた英語のアニメもこれに貢献していたと本人は考えている。

小中学校5年生頃になると、当時スロベニアのテレビで頻繁に放送されていたメキシコやスペインの恋愛ドラマに興味を持ち、毎日のように見ていた結果、スペイン語もある程度理解できるようになった。もっと流暢に話せるようになりたいと思い、語学学校のスペイン語コースを2年間ほど受講し、小中学校では8年生から9年生の間、第二外国語としてもスペイン語を履修していた。小中学校卒業時は「かなり話せた」とのことだが、今現在のスペイン語能力については、簡単な会話やドラマのセリフは理解できるものの、アウトプット（話すこと及び書くこと）は困難であると自己評価している。

さらに13歳になると、日本語に興味を持ち始め、学習を始めたという。当時、インターネット上で見ていた日本のアニメやドラマの主題歌を聞き、それを機に日本のポップソングが好むようになり、歌に合わせて自分でも歌えるようになりたいと強く感じ、日本語を勉強し始めたと述懐する。日本語の響きにも魅力を感じたと語る。レナータさんが初めて日本語を学習する機会を得たのは小中学校の夏休みだったといい、彼女が当時

住んでいた町の大学が開講していた2週間のサマーコースに参加したのだという。その後、同大学の日本語の公開講座に2年間ほど通っていた。その後、個人的な学習のみを継続していたといい、日本旅行中に会った人々やインターネット上で作った日本人の友人と月に何回か連絡を取り合っていたという。また高校卒業後に1年間在籍していたスロベニア国内の大学では、日本語学とロシア語学を専攻していた。

ロシア語は高校1年生から第2外国語として学習を開始し、その後、大学でも1年間、日本語学とともに専攻し、さらには日本の大学に進学後も外国語科目として2年間履修していたという。現在はロシア語で日常会話が可能で、また「上級レベルで読み書きができる」と自己評価をしている。

さらには、小中学校で先生にフランス語を勧められたことをきっかけに3か月間勉強していた経験や、高校生時には中国出身の人物と交際していたことから中国語の学習を1年間ほどした経験もある。現在では韓国人の友人と親しく交際しており、韓国語を学習しているというが、これら3つの言語では意思疎通がとれないと語る。

5-1-3. サラさん

サラさんはイギリスとトルコ人のハーフの父とイギリス人の母との家庭で生まれ育った。しかし、トルコ語は祖母以外に話せる者はおらず、祖母を除いて親族で英語以外の言語が話せる者はいないという。サラさんは現在、英語以外には日本語と韓国語を流暢に使いこなしている。更に、フランス語やドイツ語、フィンランド語、中国語の学習経験がある。また、これからはロシア語、モンゴル語、イヌイット語を習い始めたいという。

サラさんが初めて外国語の勉強を始めたのは10歳のときである。母にフランス語の本や教科書を買ってもらい、勉強するように言われたのがきっかけであるという。フランス語には関心がなかったと本人は語るが、それにもかかわらず勉強に励んだ。また、サラさんは14歳の時に通っていた学校でもフランス語を必須科目として学んでいた。フランス語という言語そのものの文法構造や音韻については面白いと思っていたが、フラン

スの人々や文化はイギリスの文化とさほど変わらないと思っていたため、フランス語を学習し続けるモチベーションはなかったと語る。

サラさんの関心は、もともと芸者、相撲、折り紙や日本の食べ物にあったという。13歳頃にはインターネット上で日本についてしょっちゅう調べるようになり、ますます興味が湧いたという。そして15歳のとき、日本語の教科書を購入し、独学での勉強を開始した。その後は日本ドラマの鑑賞やインターネット上のチャットルームでできた日本人の友達とのコミュニケーションを通じた練習をしばしばしていたと語る。15歳当時のサラさんは、フランス文化に感じなかった新鮮さを日本文化に見出し、日本に対してはイギリスから最も離れていて、最も「違う国」、「不思議な国」だという印象を抱いていたと述懐している。「日本の伝統文化をよりよく知りたい、日本人と話せるようになりたい、そして最終的に日本に行きたい」ということが日本語学習の動機付けだったという。高校のときに日本に留学したかったが、両親に強く反対されたため一度高校での留学を諦め、日本の大学に進学できるように頑張ると決心した。しかし高校の最終試験の成績が非常に優れていたため、両親と先生に日本の大学よりもレベルが高いとされているイギリスの有名大学へ入学するように勧められた。最終的にサラさんはイギリスの有名大学文学部日本語学科に進学した。

サラさんは「お金がなかった。」、「高いから、めちゃくちゃ高い!」、「経済的な問題があったから。」といったことを頻繁に口にしており、彼女は中産階級以下の家庭で生まれ育ったことが推測される。実際に彼女は語学学校で外国語のコースを受講できず、学校教育以外での語学学習はすべて独学であったと語る。また、希望通りに留学できなかった背景にも、彼女の生まれた家庭の経済状況があると推察される。

大学では日本語とともに、17歳から始めていた韓国語の学習も継続していた。高校生時に日本語と並行して韓国語を勉強しようと考えたきっかけは、韓流ドラマや韓国の音楽への関心だったという。大学1年生のときにサラさんの在籍していた大学が主催していたプログラムに参加し、韓国へ渡り、2か月間英語を教えた。そのため3年生時に初来日するまでは日本語より韓国語の方を熱心に学習していたという。また、大学2年生のときに国レベル、そしてヨーロッパレベルの韓国語スピーチコンテストにて賞をとったこと

もある。

大学3年生時に1年の留学経験を経て、サラさんは再び日本の文化や言語に魅了され、それ以来は日本語学習に注力するようになったという。サラさんは現在も日本の大学に正規大学院生として在学しており、現在は韓国語よりも日本語の方が上手に使いこなせると自己評価しており、「今は日本語の方が上。（中略）日本に来てから韓国語を話す機会が少なくなった。」と現状説明をしている。

なお、高校時代にはドイツ語とフィンランド語も勉強していたという。ドイツ語は高校の外国語科目として1年間、そしてフィンランド語は独学で同じく1年間ほど学習していた。フィンランド語を学んだきっかけはフィンランド人の友人ができたためだという。この2か国語は片言でしか話せないそうだ。また、現在は中国語とロシア語を勉強し始めたところである。

サラさんにとっての言語学習とは新しい文化への扉であると説明している。この先、モンゴル語やイヌイット語にも挑戦したいと語る。

6. 考察

6-1. 環境による外国語学習の差異について

本研究では日本におけるスロベニア人とイギリス人を取り上げ、スロベニア人の研究対象者2人に焦点を当て、比較対象としてイギリス人を設定した。私が本研究では、複数言語話者が母語が少数言語という環境に置かれ、暫くそこで在留した際に、母語への知覚の変化が見られるか、またどのように変化するかという課題に注目したい。

またスロベニアとイギリス、それぞれに生まれ育った対象者の複数言語話者を取り巻く環境についても取り上げたい。まず、地理的にスロベニアはイギリスの12分の1の国土面積しかなく、東西南北それぞれ異なった言語を用いるハンガリー、イタリア、クロアチア、オーストリアに囲まれている。スロベニアの日常生活においてこれらの言語を耳にするのは、決して稀なことではない。その一方でイギリスは島国であり、英語話者が人口のほとんどを占めるアイルランドとの国境以外の国とは国境を共有していない。それに加え、イギリスの公用語である英語は世界のリンガ・フランカとも呼ばれ、世界の多くの人々が話せる言語である (e.g., Seidlhofer, 2005.)。つまりは、イギリスでは英語以外の言語が話せなくても特に日常生活において、またはキャリアなどで困ることはないと考えられる。それは上記に取り挙げた欧州委員会 (European Commission, 2005) の図 (p.1 参照) からも想定できる。母語以外の外国語で会話に参加できると答えた89%のスロベニア人に対し、そうだと答えたイギリス人は僅か30%である。この結果は2005年EU圏の国々で2番目に低い値となっている。以下、研究対象者の両親の外国語能力について伺ったときも、その傾向であることが明らかになった。

G : 筆者 S : サラさん

1 G : ご両親は二人とも英語だけ？

2 S : 英語だけ。みんな英語だけ。

3 G : そうなんだ。

4 S : まあお婆ちゃん以外にね。でも英語ペラペラ。ただ訛ってる。

G : 筆者 R : レナータさん

1 G : ちなみに、えーっと、お母さんはスロベニア語のほかに何か？

2 R : 英語とフランス語とノルウェー語。

3 G : その3つの言語は結構流暢に？

4 R : 英語は普通にしゃべれるのね。だから同じくらいの年齢の人たちよりはしゃべ
5 れる

6 かな。でも若い人に比べたらもちろんそこまでいかないけど、うーん、フラン
7 ス語はちょっとなんだろうね。私あんまフランス語しゃべれないから、どれぐ
8 らいしゃべれるかわかんないけど、一応会話くらいはできるみたいだね。

9 G : じゃあお母さんも結構いろんな言語をしゃべれる感じだね。

10 R : ノルウェー語もそんな感じかな。

G : 筆者 N : ネヤさん

1 G : ご両親の話になるんだけど、ご両親の方はえ:っと、スロベニア語以外に何かで
2 きる言語？

3 N : あ、はいはいはい。お母さんもドイツ語が普通に話せて、でイタリア語もなん
4 とかできると思うけど、英語も流暢で。父の方はロシア語とか英語とかいろいろ
5 ろ勉強したけど全く話せない。

6 G : あ、そうなんだ。

7 N : なので、いつもドイツ語を勉強した時にお母さんとともに勉強して、でいろい
8 ろなんか相談してもらったから

9 G : お母さんはちなみにイタリア語もできるって言ってたよね。それはイタリアに
10 近い地域に住んでたからだとか？

11 N: いや、そうでもない。普通に独学っていうか勉強して...

この会話からわかるように、レナータさんとネヤさんの母は2人とも母語以外に様々な外国語が話せる。具体的に母の言語習得状況について伺うことはできなかったが、2人の母とも4つの外国語ができる（会話でそれぞれあげた3言語に加え、セルボ・クロアチア語も）。しかしそれにもかかわらず、レナータさんとネヤさんは幼少期、両親に外国語を勉強させられたような覚えはないと語っていた。レナータさんが初めて言語教育を受けたのは幼稚園（4歳）のときで、小中学校5年生の頃、自発的にスペイン語を勉強しようと思った。そしてネヤさんの初めての外国語学習と接触は小中学校3年生（8歳時）であった。2人比較的に幼い頃から言語学習を始めている。

その一方でサラさんは10歳のときにフランス語の勉強をするように言われ、（本人は「当時は特に勉強したくなかった」というが）14歳で外国語科目として学校でも正式的に習い始めた。スロベニア人対象者と比べ、比較的遅いと言える。

次にスロベニア人対象者の会話で特徴的だと考えたのは、対象者2人とも幼い頃からテレビで英語のチャンネルでアニメを見ていたという点である。さらに放送されていたスペイン語のドラマを通し、スペイン語がわかるようになったというところである。スロベニア語のチャンネルが非常に少ないため、大人ともに子どもは頻繁に外国語を耳にすることがある。臨界期にまだ達していない子どもは、このように自然的な言語習得できる最適な環境であるとも考えられる。

6-2. 母語の使用度について

上記にも取り挙げたように、スロベニア人は日本においてはマイノリティーである（p.8 参照）。そのため、日常生活において、スロベニア語話者同士が会うことは非常に稀なことである。以下は研究対象者が母国語、及び外国語の使用頻度について語ったものである。

G: 筆者 N: ネヤさん

- 1 G : 因みに、スロベニア語、自分の母語はどれくらいの割合で使ってる？
- 2 N : まあ、話してないけど、スロベニア人の友達とは毎日メッセージを送り合っ
- 3 ている。

ネヤさんは母語を毎日使っているという。実際話す機会は少ないが、スロベニアにいる友人や家族と頻繁にメッセージをしているようである。しかしそれ以外にスロベニア語を使うことは滅多にないと本人は語る。大学院での講義等はすべて日本語で受講しており、資料や文献もほとんど日本語で書かれたものであるようだ。また、日本の友人と会話するときは、相手の言語能力により、英語と日本語、あるいは両方を使うことが多いと語る。アルゼンチン人の交際相手とは同居しており、英語でコミュニケーションをとっているという。このように、ネヤさんの日本での日常生活での交友関係には様々な言語の使用者が存在し、その中にはスロベニア人はいないようである。そのためスロベニア語はインターネットを通じた文章のやりとりや電話のみに限られて使用されており、対面でのやりとりにおいてはほとんど使用されていないといえる。

さらに、このような状況がネヤさんのスロベニア語での表現力に影響を及ぼしており、本人は次のように語る。

- 1 G : 何語が一番自分自身を、今の時点で表現しやすいのかな？
- 2 N : ある程度までは、スロベニア語は今でも母語なので、スロベニア語で自分を表
- 3 現できると思うんだけど、表現できないところもあって、それを、そのところ、
多分英語になってると思う。なので英語とスロベニア語両方。
- 4 G : 混ざった感じで？
- 5 N : そう。
- 6 G : ベースはスロベニア語で、こうちょっと言いにくいとことか...
- 7 N : そうそう。どうしてか分からないけど、多分彼氏とずっと英語で話してるから
- 8 やっぱり自分の感情とかを表すには英語の方が最初に...
- 9 G : 出てくる。

- 10 N : そう、出てくる。
- 11 G : なるほどね。自分の気持ちとか、ちょっとう何でしょう。強い感情とか...
- 12 N : 多分。
- 13 G : 多分。
- 14 N : そうそうそう。そうだと思う。(中略)でもなんか、スロベニア人だからスロ
15 ベニア語で自分を表現したいと思うけど、やっぱりなんか、英語とか日本語に
16 慣れてるから、時々英語とか日本語から直訳してスロベニア語にするので、変
17 なフレーズとか言ったりする。すごく嫌だ。

上記の語から、ネヤさんが最も気楽に感じる話し方は、スロベニア語と英語間のコードスイッチングである。基本的にはスロベニア語で話しており、所々表現しにくいことを英語で補うスタイルをとっている。スロベニア語にはないが日本語や英語なら存在する表現を選択することや、スロベニア語での表現や言い回しを普段使わないゆえにそれらを忘れてしまうことにより、コードスイッチングが引き起こされていると考えられる。

さらにネヤさん自身にとって、この現象には好ましくない側面があるようで、表現したい内容を完全にスロベニア語のみで思い通りに伝えることが出来ない場合については、17行目のとり「すごく嫌だ。」と発言している。

日本語や英語を使用して話しやすい場合について問うと、学問的な内容の話題やメールは、日本語でしやすいと答えている。このような場面においては日本語を使うことが多いためだという。また一方で、自分自身の気持ちや愛情を表すには英語の方が楽であると答えている。約4年間に渡りアルゼンチン人と交際しており、2人の間では英語で会話がなされているとのことで、このことが背景にあるようだ。

では次にレナータさんの使用言語状況にも目を向けてみよう。

G : 筆者 R : レナータさん

- 1 G : 日常生活で一番使ってる言語は何語？
- 2 R : 日本語かなあ。

3 G : 日本語は毎日？

4 R : 日本語と英語かなあ。両方とも。だって、フラットメイトだと：4人いるんだけど、1人中国人は日本語の方が楽コミュニケーションが。その子と日本語喋ってるわけじゃん。

7 G : うん。

8 R : 日本人のクラスメイトとか先生たちとかデートとかもだいたい日本人だから日本語になるわけじゃん。あとは郵便局とかそこら辺、仕事とかもね。

(中略)

10 G : スロベニア語はどの程度どれくらいの頻度で使ってるの？

11 R : やほんとにミハと喋るときと家族と喋る時くらい。あとニナとたまに喋るか。

12 G : じゃあ毎日は使わないってことか？

13 R : いやー毎日使わない。

14 G : 週に何回位スロベニア語で喋る機会があるの？

15 R : いやー：：週に：：しゃべる？それとも書く？

16 G : しゃべる、書く、どちらでも。

17 R : 両方？

18 G : まあどっちも。

19 R : 週に2回くらいかなあ。

レナータさんの母語の使用頻度はネヤさんよりも少なく、週に2回程度であるということがわかる。日常生活ではネヤさんと同じく英語と日本語を主に使っているが、2,5,7,8行目から日本語の使用頻度の方が多いと推察される。日本語能力はネヤさんとは差異がなく、同じぐらいのレベルである。しかしレナータさんは大学への通学と並んでフリーランサーとしてモデルの仕事をしているため、毎日、日本人の写真家などのモデル業界の様々な人と関わっており、また交際していた男性が日本人だったことなどにより、ネヤさんよりも日本語を頻繁に使用していると考えられる。ところで彼女はインタビューを取る数日前まではスロベニアに帰省しており、その際に病院を訪ねたそうである。そ

のときの診断書に「スロベニア語で自分自身をきちんと表現できなかった」と記されていた。このことには、本人も気付いていたという。しかしながら、レナータさんにとって感情を表現しやすい言語はそれにもかかわらず、スロベニア語の方であるようだ。レナータさん曰く、それは日本語の感情表現がぼんやりしているからであり、またそもそも気持ちを表す言葉が少ないからである。彼女は、たとえば邦楽のラブソングの歌詞ではどれもおなじような感情表現ばかりが使われている印象が否めない指摘した。その一方でスロベニア語では感情を表す表現が豊富なため、物事をはっきりさせたい自分の性格には合っていると彼女は述べている。

また、現在レナータさんは都内の大学で社会学を専攻しており、フェミニズムやジェンダーについて学んでいる。講義やゼミナール、授業資料は日本語のものが殆どというが、大学外でもよく学んでいる社会問題の記事やドキュメンタリーを見ているため、学問的な話題では英語の方が話しやすいという。

次に以下のインタビューから窺われるように、他の言語と比較して日本語で行うほうが楽なのは、世間話であるようだ。

G : 筆者 S : サラさん

1 G : 英語は毎日でも使う？

2 S : 毎日使ってる。研究室が結構国際的で、同じ英語母語話者とあの一日本人と、

3 ほかの国の人も全部いるから、なんか日本人がいたら、まあ日本語になる。で

4 もそれ以外は英語のできる人やったら、まあみんな英語になる。

5 G : 文献とかは？今読んでる文献とか…

6 S : 文献は英語で書かれたものが多い。あと質がいい。

(中略)

7 G : どの言語で自分を一番表現できると思う？

8 S : やっぱり英語。英語で読んでるし、で私も将来博士課程に進みたいし、論文も

9 出したいけど、まあ英語で書いた方がいろんな人に読まれて、それは私にもい

10 い。

(中略)

11 S : なんか英語母語話者として、普通の生活ではもう、家族としゃべるときとか英

12 語、アカデミックな面でも英語。で世界のその共通言語は英語。

上記のサラさんの語から分かるように、サラさんはアカデミックな場面での会話や研究では英語を中心に使用しているようで、その他の様々な場面においても英語を頻繁に使用しているという。したがって、母語の使用頻度はスロベニア人研究対象者とは対照的であるといえる。

大学において、サラさんは修士論文を執筆中であり、英文での投稿を予定しているという。また、参照する文献の殆どが英語で書かれたものであるそうだ。実のところ彼女は日本語で開講されている講義を今より多く履修し、日本語でのレポートの執筆や発表をこなしていきたいそうであるが、博士課程への進学を考慮し、実際は英語で質の高い論文を書くことに注力しているという。

また、所属している研究室の環境はというと、所属する学生の国籍が多様であるため、研究室でのコミュニケーションでは日本語と英語を併用しているという。3,4行目のとおり、会話に日本人が参加しない限りは、日本語を使用しないとのことであり、研究室での主要な使用言語は英語であることがわかる。

また、大学外での交際関係でも頻繁に英語を使用するようである。彼女の交際相手は日本人であるが英語に堪能であるそうで、日本語で話す日と英語で話す日が半々になるように決めていると語る。

さらに、サラさんの英語での表現力はというと、スロベニア人研究対象者のように母語の表現力が落ちたという現象はないとのこと、来日以降、表現力に変化は感じないという。英語を毎日頻繁に、且つ様々な場面で使用していることがその一因であろう。英語の表現力には変化がないとのことであるが、発音に関しては若干の変化が認められるという。それについてサラさんは次のように語る。

「なんか同じイギリス人と喋ってないから、喋り方ちょっと変わる。(中略)なんか標準になってしまう。そのなんか、面白い味がなくなって、地味になるかな、私にとって。(中略)地元の訛りがなくなったみたい。あとアメリカ英語も結構入ってくる。なんか「store」とか。イギリス人は「store」使わない、「shop」！またもっとイギリス人ぽくなりたい。」という。

上記の通り、英語母語話者のサラさんは使用する母語について量的にも、質的にも来日以降変化が少ないようだ。これは日本国内での話者数が少ないスロベニア語母語話者とは対照的な結果であるといえる。

7. 結論

研究結果を解明化するため、研究対象者にとってどの言語が話しやすいということ
を項目ごとに分けて図にする。（今回残念ながら、対象者によってはおなじ質問をする
ことができなかつたため、表には空欄がある。（N/A））（下図）

	ネヤ	レナータ	サラ
日常会話	スロベニア語+英語	N/A	英語
感情表現	英語	スロベニア語	英語
大学／アカデミック	日本語	英語	英語
ビジネス	日本語	日本語	N/A
世間話	N/A	日本語	N/A

このように図を作ると、スロベニアの2人の対象者とイギリス人の対象者1人のあい
だの差異が明らかになる。スロベニア人の場合にみられる傾向は、使用しやすい言語が
トピックごとにばらついているということである。これらのことから、以下のことが推
察されるだろう。まずスロベニア人たちは、日本においては、おなじ母語話者に会うこ
とが減多にない。そのため、日常生活の場面において、彼女たちは自身の母語を用いる
機会にあまり恵まれず、他の言語のほうがトピックによっては自身を表現しやすくなる。

彼女たちは母語以外の言語で学習した内容を話す場合には、母語に翻訳して話すより
もそのときの用いられていた言語の方が説明しやすくなるようだ。つまり彼女たちはこ
れらの学習において、母語ではなくその言語でそれを行ったのである。彼女たちはこの
点において外国語運用能力が極めて高いと言えるだろう。

対して、イギリス人の対象者の方は、その日本語の堪能さにもかかわらず、自身を表
現しやすい言語は一貫して英語である答えている。スロベニア人のケースと対照的に、
彼女は日常生活で母語を用いる機会に恵まれている。そのため日本での生活で母語が衰

える可能性が極めて少ないのであろう。もしも、サラさんが英語話者のまったくいないような環境に身を置かない限り、他2人のスロベニア人と同じような研究結果になることはないだろう。（そしてそのような環境はあまりない。）

サラさんは表から明らかに窺われるように英語が自身の中で支配的な言語である。対して、レナータさんとネヤさんのケースは表から分かるとおおり、母語以外の言語も自身に大きく影響を及ぼしているようである。

言語使用者を大きく影響するのは、彼らが置かれている環境である。レナータさんとネヤさんはかなり早い時期に（平均年齢6歳）外国語学習に着手している。対してサラさんが外国語を学び始めたのは10歳になってからだ。冒頭にあげた表によれば（p. 3）

「母語以外の言語で会話に参加できるもの」の率がスロベニア人は89%と高い割合だが、イギリス人は30%とかなり割合がかなり低い。本研究の対象者の外国語学習時期の相違がこの結果に影響していると考えられるだろう。

スロベニアの子供たちは小中学校から既に二つの外国語を学ぶ。また、スロベニアのような母語話者の少ない国では、（とりわけメディアの多くにおいて）外国語が日常生活に溢れているため、そこから自然習得するケースも多い。スロベニア独立以前には、セルボ・クロアチア語も教えられていたため、ほとんどの国民が話すことができたということも冒頭の表の結果に影響を及ぼしているだろう。本研究から以上のような結果が導かれただろう。

引用文献

ウヴェ, フリック, 小田博志, 山本則子, 春日常, & 宮地尚子 (訳). (2002/2004). 「質的研究入門: 人間の科学のための方法論」. 東京: 春秋社.

吉島茂, & 大橋理枝, 他訳. (2004). 「外国語教育 II- 外国語の学習, 教授, 評価のためのヨーロッパ共通参照枠」. 東京: 朝日出版社.

木戸 芳子. (2006). 「EU の多言語政策—ヨーロッパにおける外国語教育」. 研究紀要 30 Tokyo College of Music, 89-108.

桜井厚. (2002). 「インタビューの社会学—ライフストーリーの聞き方」. 東京: せりか書房.

桜井厚, & 小林多寿子. (2005). 「ライフストーリー・インタビュー: 質的研究入門」. 東京: せりか書房.

法務省. (2018a). 「国籍・地域別 在留資格（在留目的）別 在留外国人」. Available at <https://www.e-stat.go.jp/stat-search/files?page=1&layout=datalist&toukei=00250012&tstat=000001018034&cycle=1&year=20180&month=12040606&tclass1=000001060399> [Date of Access: 24 Jan 2018].

法務省. (2018b). 「平成 29 年末現在における在留外国人数について（確定値）」. Available at http://www.moj.go.jp/nyuukokukanri/kouhou/nyuukokukanri04_00073.html [Date of Access: 24 Jan 2018].

柳瀬 陽介. (2007). 複言語主義 (plurilingualism) 批評の試み. 中国地区英語教育学会研究紀要, 37, 61-70.

Blom, J. P., & Grumperz, J. J. (2000). Social meaning in linguistic structure: Code-switching in Norway. *The bilingualism reader*, 111-136.

Coste, D., Moore, D., & Zarate, G. (2009). *Plurilingual and pluricultural competence*. Language Policy Division, Strasbourg: Council of Europe.

Council of Europe. Council for Cultural Co-operation. Education Committee. Modern Languages Division. (2001). *Common European Framework of Reference for Languages: learning, teaching, assessment*. Cambridge University Press.

Council of Europe. (2007). *From Linguistic Diversity to Plurilingual Education. Guide for the Development of Language Education Policies in Europe*. Available at <https://rm.coe.int/16802fc1c4> [Date of Access: 26 Jan 2019].

Eurobarometer, S. (2006). *Europeans and their Languages*. European Commission.

Perko, D. (2004). *Slovenia at the junction of major European geographical units*. na.

Republic of Slovenia Statistical Office (スロベニア共和国統計局). (2018). *Population by sex, municipalities, Slovenia, 1 January 2018*. Available at <https://www.stat.si/StatWeb/en/news/Index/7363> [Date of Access: 24 Jan 2018].

Seidlhofer, B. (2005). *English as a lingua franca*. *ELT journal*, 59(4), 339-341.

United Nations. (2017). *Total Population - Both Sexes*. *World Population Prospects 2017*. Available at <https://population.un.org/wpp/Download/Standard/Population/> [Date of Access: 24 Jan 2018].

Zarate, G., Lévy, D. & Kramsch C. (2011) '*General Introduction*' In Zarate, G., Lévy, D. & Kramsch C. (Eds.) *Handbook of Multilingualism and Multiculturalism*. Paris: Editions des Archives Contemporaines, 3-11.